



Title	楚地新出土文献へのいざない（三）：『楚地出土戰国簡冊合集（二）』（葛陵楚墓竹簡・長台關楚墓竹簡）
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2014, 58, p. 147-154
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58683
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

楚地新出土文献へのいざない（三）

—『楚地出土戦国簡冊合集（二）』（葛陵楚墓竹簡・長台闕楚墓竹簡）—

草野友子

一、『楚地出土戦国簡冊合集』の刊行

二〇一三年一月、武漢大学簡帛研究中心・河南省文物考古研究所編著『楚地出土戦国簡冊合集（二）』（葛陵楚墓竹簡・長台闕楚墓竹簡）が刊行された。本書は、『楚地出土戦国簡冊合集』シリーズの二冊目である。『楚地出土戦国簡冊合集』の刊行の経緯については、前稿においてすでに述べているが（草野友子「楚地出土文献へのいざない（二）」—武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『郭店楚墓竹書』（『楚地出土戦国簡冊合集（二）』）—、『中国研究集刊』第五十四号、二〇一二年六月）、以下、簡単に紹介しておこう。

まず、二〇〇二年から二〇〇三年にかけて、竹簡の写真収集、および赤外線カメラでの撮影などが行われ、二〇〇四年末より整理・研究の段階に入った。二〇〇七年夏、『楚地出土戦国簡冊合集』（全竹簡の図録・积文・注釈を含む）の初稿が完成し、二〇〇七年八月から二〇〇

八年三月にかけて、『楚地出土戦国簡冊合集』の原稿をベースに、『楚地出土戦国簡冊「十四種』が編集された。これらの原稿は二〇〇八年に専門家の審査を通過した後、一度全面的な照合・修訂が行われた。

そして、二〇〇九年九月、『楚地出土戦国簡冊「十四種』』（陳偉等著、経済科学出版社）が先に出版された。

『楚地出土戦国簡冊「十四種』』は、十四種の竹簡すべてを一冊で概観できる、きわめて利便性が高い書である。その特徴としては、竹簡の精密な釈読が行われている点、国内外の大量の文献を参考にして釈読に反映させている点、可能な限り竹簡の写真や現物にあたり、また赤外線撮影により不鮮明な文字を確認しているため、多くの新解釈を提示している点、所属不明の竹簡残片にも注目し、それらを含めて分類・排列を再検討している点などが挙げられる。ただし、この書には竹簡の写真図版が含まれておらず、また、注釈は基本的な内容を記すのみにとどまり、分析や例証部分は割愛された（詳細は、前稿および湯浅邦弘・草野友子『楚地新出土文献へのいざない』—陳偉等著『楚地出土戦国簡冊「十四種』』—『中国研究集刊』第五十一号、二〇一〇年十月）参照）。

二〇一一年十一月からは、『楚地出土戦国簡冊合集』の出版が始まり、その第一輯として『郭店楚墓竹書』が

刊行された。その第二輯に当たる本書は、河南省から出土した二種の戦国楚簡を収録している。

二、竹簡概要と再整理

では、本書に基づきつつ、葛陵楚墓竹簡（以下、葛陵楚簡）と長台闕楚墓竹簡（以下、長台闕楚簡）の概要と再整理の状況についてそれぞれ確認しておこう。

【葛陵楚墓竹簡】

葛陵楚簡は、一九九四年に河南省文物考古研究所等の研究機関が河南省新蔡県の葛陵一号楚墓から発掘した戦国楚簡であり、「新蔡葛陵楚簡」の名でも知られている。

発掘者は、墓葬年代を戦国中期前後と見なし、曾侯乙墓よりは遅く、信陽長台闕一号墓と江陵天星觀一号墓の年代に相当すると述べている。竹簡を根拠に推測すると、墓葬年代は楚の悼王の末年ではないかと考えられている。墓主は、楚国封君「平夜君成」である。葛陵楚簡中の紀年材料から判断して、劉信芳氏は楚の肅王四年（前二七七七年）に作られた墓であり、墓主の平夜君成はこの年に死去したと見なしている。宋華強氏は、墓葬年代の下限は楚の悼王元年（前四〇一年）から悼王七年

(前三九五年)までであるとしている。劉彬徵氏や武家璧氏は、暦から推算して、楚の悼王四年（前三九八年）であるとしている。李學勤氏は、清華大学蔵戦国竹簡『楚居』を根拠に、楚の悼王四年（前三九八年）であることを実証している。

二〇〇〇年八月、北京大学主催の「新出簡帛國際學術研討会」上で、宋國定氏と賈連敏氏が「新蔡「平夜君成」墓与出土楚簡」を発表し、後に『新出簡帛研究』（文物出版社、二〇〇四年十二月）において、学会中に提示された十三枚の竹簡の簡単な考証が掲載された。二〇〇二年には、河南省文物考古研究所等の三つの発掘機関が「河南新蔡平夜君墓的發掘」（『文物』第八期）を発表し、出土竹簡の概況や、十枚の竹簡の写真を公開した。そして、二〇〇三年十月、全竹簡の写真図版と整理者の賈連敏氏による訳文を収録した『新蔡葛陵楚墓』（河南省文物考古研究所、大象出版社）が刊行された。ここでは、初步的な綴合がなされており、図版と訳文は出土した際に付された番号を用いて排列されている。

今回の再整理は、武漢大学簡帛研究中心と河南省文物考古研究所が合同で行っている。本書では、『新蔡葛陵楚墓』の竹簡の写真図版と訳文を基礎として、竹簡に記された年・月・干支や竹簡の形制、簡文の内容、字体などを占うもので、文

どを根拠に、新たに竹簡の綴合・再排列・分類がなされている。

『新蔡葛陵楚墓』の整理者の統計によると、竹簡は現存一五七一枚とされているが、照合の結果、『新蔡葛陵楚墓』には三枚の重複があり、実際は一五六八枚であることが判明した。竹簡の幅は〇・八cm前後、狭いもので〇・六cm、広いもので一・二cm。現存文字は約八〇〇〇字。簡文には篇題が見られないが、その内容はト筮祭祷と簿書の二種に分類できる。ト筮祭祷簡は、竹簡の長さが一定ではなく、

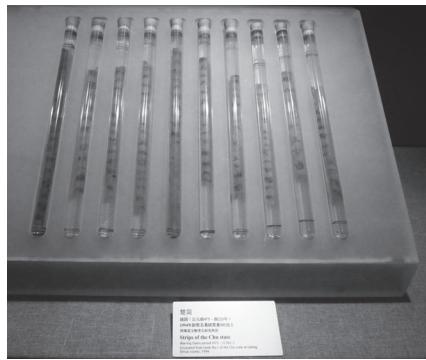
完整簡の簡長は約十五cm、幅は〇・七cmであると見られる。簿書の完整簡の簡長は、三十二・五cmである。



葛陵楚墓竹簡（河南博物院展示）

辞・形式は包山楚簡と似ている。第二種は、「平夜君成」自らの祈祷記録で、秦駒祷病玉版の文字と近似している。第三種は、専門的な祈祷記録であり、第一種に見えるような占いの手順はなく、月名・干支・祈祷の動機・祭祷神鬼名・祭品・祭祷日干支が書かれているのみである。各回の卜筮・祭祷には前後の順序があり、それらが互いに関連しあっていることを考慮して、本文では卜筮・祭祷の時間の組み分けと順序に基づいて排列されている。ただし、竹簡の断裂や欠損が多いため、本文を完全に復原することはできない。

簿書は、おおよそ二種に分類される。第一種は、盟約に参加した者と受け取った物品の数量を記録したものである。第二種は三つの部分よりも、第一は「命里人祷」の指令、第二はその土地の牲の種類や数量などを統計したもの、第三は祈祷する時



葛陵楚墓竹簡（河南博物院展示）

に用いた牲の種類・数量とその統計などである。簿書の性質については、諸説ある。

このほか、竹簡の欠損が甚だしい、あるいは文字が不明でどこに分類すべきか不明であるものは、「未帰類簡」として最後にまとめて列挙されている。

本文は彭浩氏と賈連敏氏が執筆し、陳偉氏が査定した。竹簡の写真図版は、河南省文物考古研究所より提供された『新蔡葛陵楚墓』の竹簡の写真が採用されている。

【長台閨楚墓竹簡】

長台閨楚簡は、一九五七年に河南省文化局文物工作隊が河南省信陽長台閨一号墓を発掘したときに出土したものであり、「信陽楚簡」の名でも知られている。戦国中期の楚墓であり、墓主の身分はおそらく大夫であると見られている。

一九五七年、『文物参考資料』（第九期）において発掘簡報と竹簡の写真が発表された。一九八六年、『信陽楚墓』（文物出版社）が出版され、写真と整理者の劉雨氏による「信陽楚簡文与考釈」が掲載された。そして、一九九五年、商承祚編著『戦国楚竹簡匯編』（齊魯書社）が刊行され、全竹簡の写真と模本、考釈、字表が掲載さ

れた。二〇〇四年には、「楚簡綜合整理与研究」項目課題組が河南省文物考古研究所に現存する長台闕楚簡の赤外線撮影を行つた。

竹簡は、長台闕一号墓の前室と左後室から出土した。

前室より出土した一組の竹簡は、篇題が見られず、「竹書」と仮称されている。竹簡枚数は一一〇枚、約五〇〇字。欠損が甚だしく、最長簡は約三十三cm。三道編綫で、上端と下端には一cm程度の留白がある。内容は典籍に属し、簡文中には対話の用語として「周公」「君子」等の語が見え、儒家の著作、あるいは『墨子』の佚文ではないかと見られている。

左後室より出土したもう一組の竹簡は、比較的保存状態が良い。竹簡枚数は二十九枚、約一〇三〇字。簡長は六十八・五cm、六十八・九cm、兩道編綫で、上端から十八cm、下端から十五・五cmのところに編繩痕がある。内容は遣策（副葬品のリスト）に属し、その中に記されている器物と実際の副葬品とは少なからず対応している。

『信陽楚墓』の整理者は、三片を綴合して竹簡番号2-016としているが、本書では、三片の中の文字が書かれている二片（2-016-1、2-016-2）は、契口の位置・形制が遣策簡と同種ではなく、簽牌（署名した札）に属すべきであると指摘している。そのため、本書では、2

1-016-1と2-016-2は「附 簿牌」として掲載されており、2-016-3は遣策簡の末尾に配置されている。（なお、「楚地出土戰国簡冊「十四種」」においては、竹簡番号2-016-3の記載は見られない。）

今回の再整理は、武漢大学簡帛研究中心と河南省文物考古研究所が合同で行つてある。本文は劉國勝氏が執筆し、陳偉氏・彭浩氏が査定した。竹簡の写真図版は、河南省文物考古研究所より提供されたものが採用されている。また、「楚簡綜合整理与研究」項目課題組が新たに撮影した赤外線写真も収録されている。

なお、本書「序言」によると、写真収集の際に、『信陽楚墓』で使用された竹簡の写真と、河南省考古研究所資料室にて一部のフィルムが見つかったとのことである。

三、本書の構成と特色

以下、本書の構成と特色について紹介していきたい。本書の目次は次の通りである。

『楚地出土戰国簡冊合集（二）』（葛陵楚墓竹簡・長台闕楚墓竹簡）

（武漢大学簡帛研究中心・河南省文物考古研究所編

著、陳偉・彭浩主編、彭浩・賈連敏・劉國勝撰著、

文物出版社、二〇一三年一月、A4、本文一六〇

頁・図版八〇頁、横組繁体字、二三八元）

目次

序言

凡例

葛陵楚墓竹簡

長台閔楚墓竹簡

前言

一 ト筮祭祷

二 簿書（甲・乙）

三 未帰類簡

主要参考文献

図版

まず、「序言」において、竹簡が発見された経緯、墓葬形態・副葬品、墓葬年代、出土した文献の内容、どのように整理・刊行が進んできたか、といった基本的な情報が提示されている。

統いて、各文献の釈文・注釈を掲載している。その際、冒頭に文献の基礎情報や竹簡の排列案等について記している。釈文部分の竹簡排列は、整理者や先行研究が

提示した綴合・排列案を参考にしつつ、並び替えられている。竹簡番号については、文献公開時に用いられたものがそのまま使用されている。

釈文は、竹簡に書写された文字をもとに隸定したものと記し、（ ）内に釈読した文字を記載している。文字は、通行字体を使用し、通行字体にないものについては字形から隸定が行われている。隸定が困難な場合は、その文字の画像が掲載されている。文字に関する凡例は、以下の通り。

- ・異体字・仮借字を通行字体にしている場合は（ ）内に。
- ・誤字を正確な文字に改めている場合は（ ）内に。
- ・残っている筆画や文意によって文字が確定できる場合は【 】内に。また、文意や他の文献によって欠文を補うことができる場合も、【 】内に記載する。
- ・筆画が鮮明ではない、あるいは残欠して判読できない文字は、□で表示。残欠部分の文字数が確定できない場合は、……で表示。
- ・竹簡が断裂している場合は、□で表示。
- ・脱字・衍字については、釈文ではそのまま掲載し、注釈の中で説明する。

文字の確定は、二〇一一年十二月までに発表された学術雑誌、研究書、論文集、武漢大学簡帛研究中心「簡帛網」や復旦大学出土文献与古文字研究中心HPに掲載された論文など、国内外の研究成果を参考にしており、その詳細は、「注釈」に記載されている。「注釈」においては、整理者の解釈とそれに対する異説が提示されているが、すべての説が逐一挙げられているのではなく、主要なもののみを抽出している。異説については、著者名の後ろに発表年とページ数が記されており、巻末の「主要参考文献」と対応している。同一年に複数の論文がある場合は、発表が早いものからA・B・Cと記号が付されている。

では、本書と「楚地出土戦国簡冊「十四種」」所収の「葛陵楚墓竹簡」および「長台関楚墓竹簡」とは具体的にどのようない点が異なるのかを見ておこう。

一つは、竹簡の写真図版が掲載されている点である。『楚地出土戦国簡冊「十四種」』では写真図版は収録されていなかつたが、本書には全竹簡の写真図版が収録されている。また、写真図版は、本書で採用されている竹簡の排列順に並び替えられているため、釈文部分との照合を容易に行うことができる。

長台関楚簡については、不鮮明な文字の赤外線写真も

収録されている。写真図版中の該当竹簡の文字の横に「紅外1」「紅外2」（紅外は、赤外線の意）などと記載され、写真図版の末尾にそれぞれの文字の赤外線写真が全部で八例（八文字分）掲載されている。『楚地出土戦国簡冊「十四種」』では、どの文字が赤外線撮影による成果なのが明示されていなかつたが、本書においてはすべて注釈に明記されている。

もう一つは、詳細な注釈の提示である。本書では、『楚地出土戦国簡冊「十四種」』では割愛された注釈・解説や最新の研究成果が収録され、より詳細なものとなっている。参考までに、注釈数を以下に示しておく（『楚地出土戦国簡冊「十四種」』→『楚地出土戦国簡冊合集（二）』の順）。葛陵楚簡、ト筮祭祷（三四七→四四六）、簿書・甲（二〇→二四）・乙（七一→八五）、未帰類簡（四→八）。長台関楚簡、竹書（六八→六八）、遣策・簽牌（一七五→一八〇）。

最後に、本書の意義について述べておこう。

本書は、これまでの研究成果を踏まえた上で、竹簡の綴合や排列、文字の再検討が行われており、新解釈も提示されている。竹簡排列については、例えば、葛陵楚簡の甲三一九八・一九九→二と甲三二一〇とを連続して読む案を提示し、これにより、この部分の簡文は連続して三回占いが

行われていることが明らかとなつた。文字解釈の面では、例えば、葛陵楚簡甲三31の中に見える文字について、整理者は「謠」と釈讀しているが、これは『左伝』に多く見える「其繇曰」に相当し、歌謡の辭ではなく、繇辭（占いの辭）である可能性が高いことを指摘している。

葛陵楚簡と長台関楚簡は、ともに竹簡の断裂・残欠が多く見られる竹簡である。このような資料の再整理・再解釈を行い、可能な限り復原を試みたことには、非常に重要な意義がある。もつとも、これで研究が完結したわけではなく、新資料の公開と共に、未解決の問題や難読箇所の再検討が相互に進むはずであり、本書はその契機を与えてくれているとも言える。

『楚地出土戦国簡冊合集』シリーズは、今後も引き続き刊行していくであろう。これにより、楚簡研究がより発展していくことを期待したい。

【附記】

本稿は、武漢大学簡帛研究中心より本書を寄贈していただいたことを契機に執筆する運びとなつた。陳偉教授をはじめとする武漢大学簡帛研究中心の関係者各位に、心より御礼申し上げたい。

本稿は、平成二十五年度日本学術振興会・科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。